
タイムリミットボム

柳 大知

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムリミットボム

【Nコード】

N3485F

【作者名】

柳 大知

【あらすじ】

妻に離婚を切り出した男。彼の身に起こる異変とは？

帰宅すると妻はリビングでTVを見ていた。
夫が帰ってきたというのに何の一言もなく、リビングにはTVの音だけが響いている。

結婚2年目、夫婦の関係は冷え切っていた。結婚してしばらくすると女の態度が豹変した。家事もほとんどしなくなり、最近では会話もほとんど無い。

それは想像していた結婚生活とかけ離れたものだった。
そしてついに限界に達した。

「もう我慢できない、離婚してくれ」
スーツの上着を脱ぐと離婚話を切り出した。

帰宅ラッシュの電車の中でいろいろとシュミレーションした。きつと上手くいく。

「いいよ」

あまりにもあっさりと答えが返ってきた。

「慰謝料1億ね」

そう言った女は男が帰宅して以来ずっとTV画面から目を離さない。
い。

「1億？払えるわけ無いだろ。だいたい悪いのはお前だろ！」

女はチラッと男のほうを睨みつけたが何も言わずTVに目を戻した。

「なあ、真面目に話をしよう！」

怒りのせいで多少声が大きくなった。

「うるさい、離婚したいなら1億ちょうだい！」

そうつと妻は立ち上がり自分の寝室へ入っていった。

畜生！

イライラを少しでも抑えようと、脱いだ上着のポケットからタバコを取り出した。

しかし一本もない。タバコの箱を握りつぶし外へ出た。

マンシヨンの階段をドタドタと音を立て降りていく。どうも頭に血がのぼっている様だ。

マンシヨンの裏手の扉を出ると息をフーッと吐き、駐輪場を通り、近くのコンビニへ向かおうとした。

が、そのとき急に胸に激しい痛みを感じた。苦しい……だめだ……男はその場に倒れた。

……ん

……あれ、よかった……生きてる

（いや、お前は死んだんだ）

どこからか声が聞こえる

「誰だ？」

周りを見渡したが誰もいない。

（あんたの中だよ）

頭の中で声が聞こえる、俺はおかしくなったのだろうか。

（いいから聞け、さっき、お前は心臓発作で死んだ。だが俺のおかげで活動できている、いいか、俺がお前の体から離れた瞬間お前は本当に死ぬんだ。）

本当なのか？あんたはいたい何者だ？

（あんまり考えるな時間がないぞ、あと1時間、24時になったら俺はお前を離れる。）

じゃあ俺はあと1時間で死ぬっていうのか？

（もう死んでるよ）

待ってくれ！おい！どういことだ

（ああ、面倒くさい！いいか、今から一瞬、離れるぞ、それっ）

頭の中の声が「それっ」と言ったのと同時に、男の体は地面にぱたりと倒れた。

本当に一瞬の出来事で、気づくと目の前が地面だった。

（わかったな、1時間しかないぞ最後の晚餐でもなんでも好きなことをしろ、どうせ死ぬんだ。やりたいことをしろ）

信じられない、だが夢ではなさそうだ。あと1時間で何ができるんだ…

頭が混乱している、外へ出てきた目的も忘れゆっくり階段を上りながら自宅へ戻ってきた。

ため息をつきソファーに腰掛ける。

ふと時計を見た。

23時02分、あと1時間を切っている。

TVがついていた。人気絶頂の女性歌手が豪華なセットを背に歌っていたがすぐに消した。

いったい何故1時間の猶予が与えられたのだろうか？

死ぬ前の人間みなに与えられるのだろうか？

そんな話、聞いたこと無い。

もしあのまま死んでいたら？

俺の死後か…

会社のデスクには花、俺はあの田んぼの中の墓で両親と共に眠るのだろうか。

あの女…あいつはどうなる？ 邪魔者が生命保険を残して消えてくれるんだ、

そりゃ愉快だろうな。

考える内にだんだん腹が立ってきた。

立ち上がると体は勝手にあいつの寝室へ向かった。

時刻は23時15分

ドアを開けると女は邪魔くさそうに男を睨んだ。

だが、そんな顔も気にせず男は話を始めた。

「そんな顔しないで聞いてくれ、俺死ぬんだ。24時になったら、たぶん死ぬ。嘘じゃない。本当に死ぬと思う。俺がお前に嘘をついたことがあったか？俺が死んだら結構な額の生命保険も入るし。快適な生活ができるんじゃないか？よかったな、」

途中から何を言ってるかわからなくなった。

勢いできたものの、自分が何を求めているのかも分からない。

「何？自殺でもするの？」

女は奇妙なものを見るような目で男を見て言った。

「いや自殺じゃない、おそらく心臓発作だよ。神のお告げみたいなもんがあつて、その…わかるんだ」

そう言ってみたもの、普通の人が急にそんな事を言われて誰が信じるだろうかと思った。

少しの沈黙があつて女は口を開いた。

「あつそ、ご勝手に、もういいから、早く出てって」

俺は何を求めていたのか？リビングに戻るとこの数分が非常に無駄に感じた。

時計を見ると残りの人生は30分余り。

最後の晩餐か…

冷蔵庫を開けると缶ビールが1本だけあった。

フタをあけ氷を入れたグラスに注ぐ、よく冷えていた。

グラスを持ってソファーに座りビールを一口飲んだ。美味い。
帰宅してから何も飲んでいなかったのもあるだろうが、とにかく美味かった。

不思議と何かをしたいと思わなかった。

死を受け入れたのだろうか、軽くなっていく缶に自分の残りの命を重ね

ゆっくりと味わった。

23時59分 缶に残っていたほんのわずかを飲み。缶は完全に空になった。

時計の針が12を指して重なった。

…
…
…ん

まだ生きている、時計の針はすでに日付が変わったことを示している。

TVをつけた。毎日24時ちょうどに始まるニュース番組がやっている。

俺は死なないのか？

そうだ！頭の中の何か、おい！24時に離れるんじゃないのか
そう思った瞬間、目の前が真っ暗になり意識が飛んだ。

やはり、死んだのか…

…
…

あの声が聞こえてきた。

（いやあんたは生かすことにした。）
何だって？

（あんたが体験した今の1時間、あれは現実じゃない。

俺が創った仮想世界、俺が命を奪った人間には最後の1時間を与えてやるのが主義でね、

普通の人間なら取り乱し、苦しみ、泣き、そして誰かに伝え、狂って人を襲うやつもいる。

そしてほとんどの人間が最後の瞬間まで死にたくないと祈るのさ…その様が好きでね。）

何を言ってるんだ？お前が命を奪ったって…

（そう俺はそういう存在なんだ、人の生死を操れる、だがお前はつまらな過ぎた。

もつとこの世に未練を残せ、そしていつか苦しみを俺に見せてくれ。）

勝手だな…

（まあ、いいじゃないか、お前はまだ当分生きれる、ただ…その代償は頂いたがな、

それと俺の存在を知って生きているやつは今はお前だけだ。

誰かに存在を教えようとした瞬間お前の命は無くなるから、覚えておけ。じゃあな）

…

気がつくと、マンションの駐輪場だった。

ずっとこの場に倒れていたのだろうか、さっきまでの出来事は夢だったのかも知れない。

とりあえず部屋に戻ることにした。

ドアを開けリビングに入った。そこには女が苦悶の表情を浮かべ倒れていた。

時計を見る23時02分だった。

TVでは見たことのあるセットで女性歌手が歌っている。

（後書き）

初投稿です

下手くそですいません

読んでいただいてありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3485f/>

タイムリミットボム

2010年10月8日15時33分発行